2018（平成 30）年度
武蔵大学 FD 活動報告書

刊行にあたって

武蔵大学長　　山嵜 哲哉

本学のファカルティ・ディベロップメント（FD）活動は、2000 年の「授業評価アンケート」を契機に、学部における授業改善の試みとしてスタートした。その後、2010 年に「武蔵大学における FD 活動の基本的方針と課題」がまとめられ、本学の FD 活動の基本枠組が以下の５項目にまとめられた。

1）大学経営の中核的課題の一つとして FD・SD 活動を位置づける
2）教育活動改善の取り組みを FD と定義する
3）従来の取り組みの前進点を確認し、革新しつつ継承する
4）学部等が主体的に関わる全学的推進体制を整備する
5）学生・教員・職員の参加体制を構築する

これら５項目を念頭に、同年度から全学的な活動報告書がまとめられるとともに、FD 研修会、学生参加による FD フォーラム、大学院 FD 懇親会、ベストティーチャー賞など、さまざまな取り組みが行われてきた。これらの活動は、2014 年度の大学基準協会の認証評価においても一定の評価を受けた。

さて、2018 年度の特徴的な活動は、

① 副学長が FD 委員長を担い、より一層の活性化が図られたこと
② 授業評価アンケートを Web 化し、学部学生及び担当教員にオンライン上でもフィードバックを実施したこと
③ 大学院生向け授業評価アンケートを、オンライン上で実施したこと
④ 大学院生と授業改善に関するテーマだけでなく幅広く情報交換を行う場として大学院 FD 懇談会から大学院懇談会に名称を変更し、これまで以上に積極的な情報交換が行われたこと
⑤ FD 研修会で学内講師による「英語による授業の進行・設計」について研修を行ったこと
⑥ FD フォーラムにおいて、留学を経験した学生や初年次教育について、改善意見を聞く機会を得られたこと等が挙げられる。

また、②については、教室における Wi-Fi 環境の対応など、学生・教員・職員の理解と協力により、従来の紙配布による方法から移行することができた。今後、授業改善とともに緻密な IR が可能になり、現在策定中のアセスメント・ポリシー及び「卒業論文・ゼミ論文」等の評価基準（＝ルーブリック）とともに、学修成果の可視化に向けて一層の発展が期待される。

2018 年度活動報告

FD 委員長　高橋 徳行

本学では FD 活動を定期的に検証し、活動内容を広く教職員の皆様に知っていただき、本活動をより良くしていくために、毎年度末に武蔵大学 FD 活動報告書を作成しています。本報告書は、その 2018 年度版になります。活動の詳細については、本書のそれぞれの報告内容をご覧いただくとして、ここでは 2018 年度の活動全体を、今年度から新しく始めた試みを中心に、振り返っておきたいと思います。

第１に、2018 年度の FD 活動の中で特筆したい点は、授業評価アンケートの Web 化です。ご案内のとおり、2017 年度までは、学生にアンケート用紙を配付し、回答欄にマークをしてもらい、その後回収し、封筒に密封した後、集計業者に引き渡していました。それを、今年度からは、Musashi Study Support System（以下、３S）にアクセスしてもらい、スマートフォンやパソコンを通して回答できるように変更しました。この変更は、第三次中期計画の施策の一つとして河合康夫前 FD 委員長の時に企画されたものです。新しい方法の導入については、インターネットにうまく接続できるかなどの不安はありましたが、先生方と関係部局の皆様の協力により、大きなトラブルもなく、実施することができました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

授業評価アンケートを Web 化したことにより、紙の節約や配布や回収作業の省力化ができた他、今までの方法では把握できなかった情報を得たり、サービスを提供できたりするようになりました。一例を紹介しますと、今年度からは学生単位での情報を得ることができるようになりました。従来は、「授業」単位の情報のみでしたので、すべての授業合計で、学生が何時間程度、予習や復習に時間を当てていることがわかりませんでした。このような結果は、本書の「第Ⅱ部　授業評価アンケート等」に収録されていますので、ぜひご一読ください。

新しいサービスとしては、学生への情報開示です。現時点では、履修している授業だけで、単純集計をした結果ですが、授業評価アンケート結果について３S を通して閲覧することができます（大学院除く）。これも昨年度まではなかったことです。

FD 委員会としては、良い FD 活動には良い情報やデータが必要と考えていますので、来年度も、引き続き、ご協力のほどお願い申し上げます。

第２は、来年度の授業評価アンケートの設問に、ディプロマ・ポリシー（以下、DP）に対応する項目を加えるようにしたことです。昨今、内部質保証の着実な実行が要請される中で、教育活動においても、いわゆる Plan Do Check Action(以下、PDCA)サイクルをしっかり回していくことが重要です。それには、一つひとつの授業で、DP のどの部分がどの程度まで学ばれたのかを測っていく必要があります。来年度スタートするのは、全学部の DP に対応した項目を全授業において同じ設問内容で尋ねるというものですから、最終ゴールからは遠く離れたものになります。しかし、PDCA を回し、最終ゴールを目指した第一歩になると信じています。さらに、学習成果の把握は、授業評価アンケートなどによる間接評価だけでは不十分であることも認識していますので、他部局との連携も深めていきます。

第３は、学生が選ぶベストティーチャー賞に、ゼミ・演習部門を加えたことです。顕彰制度は、いわゆる全体の「ベスト１」を選ぶことが主たる目的ではなく、さまざまな専門分野の授業形態で工夫を凝らしたり、学生満足度を高めたり、DP の実現を図ったりしているなど、多様な基準の中で、それぞれの一番があって良いと思います。今年度は、その一環として、新たな賞を設けました。来年度も、引き続き、検討を進めます。

第４は、大学院にも授業評価アンケートを実施したことです。本学では大学院の一授業当たりの履修生が少ないこともあり、学部とは異なり、３つの項目に対し自由記述という形を取りました。ただ、やはり、履修生が１人か２人という中で、「書きづらい」という声も多く聞かれましたので、来年度に向けて改善を図ります。

次からは、毎年度実施している主な活動になります。

第５は、FD 研修会です。この研修は、主に教員を対象として、FD 活動の向上のために外部から講師を招いたり、学内の教員に講演をお願いしたりしています。今年度は、「英語による授業の進行・設計」というタイトルで、経済学部と人文学部、社会学部の教員に講師をお願いして実施しました。

第６は、大学院懇談会です。2017 年度までは、大学院 FD 懇談会として行っていたものです。これまでは大学院生を対象とした授業評価アンケートがなかったこともあり、大学院生からは講義やカリキュラムについての意見だけではなく、奨学金や図書館の開館時間、研究室の設備など様々な要望を大学に求める場としても機能しているものです。その開催に先立って、2016 年度からは、研究・教育環境に関するアンケートを実施し、それに基づいて議事を進行するようにしているため、より準備をした形で、当日の議論が深められるようになっています。

第７は、FD フォーラムです。これは学生の代表に、授業やカリキュラムで感じている問題や改善してほしい点について、提案をしてもらい、それをもとに出席者が自由に意見交換するという企画です。今年度は「外から見た武蔵大学」というテーマで留学経験のある学生を三学部から１名ずつ、そして「１年生の時に学んで役に立ったこと、教えてほしかったこと」というテーマで、こちらも三学部から１名ずつの学生が発表し、その後、教員と学生による意見交換を行いました。

最後に、FD 委員会の活動ではありませんが、本学の特色ある教育について、本報告書に掲載しておりますので、ぜひ目をお通し下さい。一つはゼミ活動を中心とした取り組みです。学部横断型課題解決プロジェクトは課題解決型の授業実践の事例であり、ゼミナール対抗研究発表大会（ゼミ大会)、卒業論文報告会、シャカリキフェスティバルは、学部ごとにその特質を活かしつつ行っている学生の研究発表の機会を提供しています。もう一つは、三学部におけるグローバル化に対応する教育です。経済学部についてはロンドン大学と武蔵大学とのパラレル・ディグリー・プログラム、人文学部についてはグローバル・スタディーズコース、社会学部についてはグローバル・データサイエンスコースの取り組みについて紹介しています。

また、本報告書の最後には、会議記録、外部の研修会への参加記録、関連する事業報告書などを掲載しました。これらの記録を通じて本年度の本学の FD 活動の状況を理解していただくことができれば幸いです。